教学入門 ③　三証と五重の相対

※次の文章は「三証」についての説明です。それぞれいずれにあたるか書きなさい。

（ 現　証 ）　教義を実践した結果が生命や生活、社会にどう現れたか
（ 文　証 ）　経典や仏典に基づいた裏付けがあるか
（ 理　証 ）　道理にかなっているか

※「三証」に関する次の文章を完成させなさい。

御書に「仏法と申すは（ 道　理 ）なり」とあるように仏法は道理に外れた主張は用いてはなりません。また「日蓮 仏法をこころみるに（ 道　理 ）と文証とにはすぎず、又道理証文よりも（ 現 ）証にはすぎず」とあるように仏法で最も重視されるのは（ 現 ）証です。それは現実の人間を救うために（ 仏　法 ）があるからです。

※次の文章は「五重の相対」についての説明です。それぞれいずれにあたるか書きなさい。

（ 大小相対 ）自分だけの悟りを目指す教えか
　　自他共の幸福をめざす菩薩のための教えか
（ 種脱相対 ）法華経文上の本門（脱益）か
　　南無妙法蓮華経を明かす大聖人の文底独一本門（下種益）か
（ 権実相対 ）二乗や女性は仏になれないと説く仮りの教えか
　　万人が成仏できると説く真実の教えか
（ 内外相対 ）人間の幸・不幸の因果を的確に説いた仏教か
　　因果を説かない、又は説いても偏った因果観である仏教以外の諸宗教か
（ 本迹相対 ）始成正覚の立場で説いた迹門（法華経前半１４品）か
　　久遠実成の立場で説いた本門（法華経後半１４品）か

※語群から言葉を選んで次の説明の文章を完成させなさい。【大小相対】【権実相対】

大小相対で比較される小乗教は自分だけが悟ることを目指す二乗（ 声聞界・縁覚界 ）のための教えです。大乗教は自他共の幸福を目指す（ 菩薩 ）のための教えです。自分の生命を否定（身を焼き智恵を断滅）する（ 灰身滅智 ）の考えではなく、煩悩に覆われた生命に菩提の智慧を現して仏界の生命の確立を目指す（ 煩悩即菩提 ）の考えを説いています。

権実相対では、大乗教の中を（ 権大乗教 ）と（ 実大乗教 ）に分けて比較します。後者は経典でいえば（ 法華経 ）のことであり、前者はそれを説くための仮の教えとなり、釈尊が説いた（ 法華経 ）以外のすべての経典となります。この二者の大きな違いとして九界と（ 仏界 ）の関係性があります。九界と仏界の間に大きな隔たりがあるのが（ 権大乗教 ）であり、十界互具を説くのが（ 実大乗教 ）です。結果的には権大乗教では（ 二乗 ）や（ 女人 ）、（ 悪人 ）は成仏できないことになります。

灰身滅智	煩悩即菩提	実大乗教	権大乗教	菩薩	仏界	
二乗	女人	悪人	法華経	煩悩即菩提	声聞	縁覚

※語群から言葉を選んで次の説明の文章を完成させなさい。【本迹相対】【種脱相対】

本迹相対では、釈尊の説いた（　法華経　）の中を前半14品と後半14品に分けて比較します。釈尊は仏の立場で法を説きますが、前半は仮の姿、後半は真実の姿です。その違いは釈尊自身がいつ仏になったのかということです。前半では何度も生を繰り返して長い修業を経て仏になったとする（　始成正覚　）の立場でしたが、後半でははるか久遠の昔、生命が誕生した当初から仏の生命は備わっていたという（　久遠実成　）の立場を明かします。このことによって全ての衆生が今いる場所、姿のままで（　仏界　）の生命を開くという真実の成仏観、真の生命原則が明らかになったのです。

第五の比較である種脱相対は日蓮仏法を信受する私たちにとって重要な比較となります。私たち末法の衆生は（　釈尊　）の仏法では（　仏界　）の生命を開くことができず、日蓮大聖人の仏法によって初めて（　成仏　）できることが明らかになります。釈尊は（　法華経　）後半の14品において久遠実成の仏の姿を明らかにしますが、どうやって仏になったのかについて「久遠の修行」とのみ説いています。大聖人は釈尊が行じた修業とは何かを洞察され、万人が持つ仏界の生命を全ての人が開き顕すための根本法を明らかにします。その根本法こそが（　南無妙法蓮華経　）の題目です。釈尊在世の様々な説法を通じて生命が整い調熟してきた衆生は、仏の生命が厳然と存在するとの説法で真実を覚知し仏を開くことができる衆生でした。この成仏の経緯を得脱といい、その利益を（　脱益　）と呼びます。時代が下って末法に生きる私たち衆生は、成仏の根本法を信受してこなかった衆生です。仏の生命が厳然と存在している（　仏種　）を直ちに説き、本来備わる永遠の仏界の生命を直接に触発するとの意味を込めて（　下種益　）の仏法と呼びます。大聖人が「彼は（　脱　）此れは（　種　）なり彼は一品二半此れは但（　題目　）の五字なり」と述べているように、その修行法は（　南無妙法蓮華経　）の実践にあります。

法華経	始成正覚	久遠実成	法華経	南無妙法蓮華経	題目		
脱益	下種益	日蓮大聖人	釈尊	脱	種	成仏	仏界	仏種

【補足説明】今回の出題範囲ではありませんが学習理解のためにおさえておいて下さい。
※仏法観における時代区分について、語群から適切な言葉を選んで文章を完成させなさい。

仏法観における時代は大きく3つに区分されます。
第一の時代は（　正法　）時代です。釈尊在世および死後千年間を指します。釈尊が説いた（　法華経　）二八品を聞くことで（　仏界　）の生命を開く衆生が生きた時代です。
第二の時代は（　像法　）時代です。釈尊の死後千年から二千年の千年間がこれにあたります。法華経の説法だけでは成仏できず理論的な理解を必要とする衆生が生きた時代です。この時代に（　天台大師　）が登場して（　理の一念三千　）の法理が明らかにされます。
第三の時代が私たちが生きる（　末法　）時代です。よく経典にある第五の「五百歳」つまり釈尊滅後二千年以降の時代です。世も末の五濁悪世の時代の衆生は（　法華経　）本門寿量品の（　文底　）に秘沈された（　南無妙法蓮華経　）の実践があって初めて（　仏界　）の生命を開ける衆生なのです。

正法	像法	末法	南無妙法蓮華経	法華経	文底	理の一念三千	
事の一念三千	仏界						